

私の家族関係研究・発達研究の前半20年の回顧物語

小 嶋 秀 夫

1 この40年を二分割する

この小論を、およそ40年^{*1}にわたる自分の研究キャリアの前半部の回顧談をメインにして構成することにした。この種の昔話は、ややもすると高年性の自己洞察欠如を露呈する危険性を孕んでいる。そのリスクを敢えて冒そうとする理由は、自分の前半の歩みが、いろいろの偶発的とも思える出来事と絡み合いながら、後半のそれと何らかのつながりをもつのかを考えてみたいと思うからである。実は、私の論文目録に含まれている最近の著作・論文のいくつかは、本質的にコースの終わり近くになってからの「遅すぎた疑いと気づき」の表明だといえる^{*2}。それにもかかわらず、それは懺悔録・後悔談ではなく、後知恵による居直り話となっている。自分では、家族関係と人間発達の領域で仕事をしてきたとっていて大きな転換を意識したことはない。しかし、他者の視点に立つと、やや不可思議・了解困難なコース転換があったようにも見え、70年代の終わり近くがやはり1つの転換点だったのかも知れない。

その前半部分は、時代的には1970年代の終わり頃まで

で、年齢でいうと40歳過ぎまでに当たる。ついでながら、それは中国医学の影響下にあった近世日本では血気が衰え始める「初老」の時期だと規定され、わが国の多くの地方で年祝いを始めた時期であった。40歳頃から老化が始まるという一種の生物学的視点は18世紀に多数現れたわが国の養生書に出ているし、民衆にも理解されていたことは19世紀初めの『諸国風俗問状答』の記述から窺える。それは俗に男の厄年とされる人生の転換点を迎える時期でもあった。

しかしながら当時の人々には、年齢を重ねる歩みは生物学的自然の進行に任せる過程ではなく、本人にとって努力を要する課題だとする理解もあったのではないだろうか。たとえば、土佐藩士で文人でもあった楠瀬大枝が数え年40の年祝いから10年・20年後の節目の年を迎える気持ちを述懐した和歌には私も共感を覚える。それは老いる過程を山登りに喩えたものであった（燧袋）。後のが詠まれたのはかれの最晩年で、数え年60を迎えようとする天保5年のことであった。

わが腰は まだかがまねど梓弓
いそじの坂はこえうかりけり

老いの山 廿年のぼる年の坂
こえやすからぬものにぞ有りける

翻って自分の後半の20年の仕事を考えてみると、1970年代の終わりから80年代全体にわたって、いろいろのことに手を伸ばした。近世日本の子育て論の分析、ある桑名藩士の家族生活と子どもの成長記録の分析、日本の学びと課題解決の構えの文化的特徴の研究、それら3つの課題と関連した児童発達観の研究、描画とナラティブによる個人のライフコース像の把握法の開発、慈しみ育む心と技能としてのナーチャランスの研究、乳幼児のきょうだい関係（親を含む3者関係）の共同研究、小児心身症の家族背景を解明するための研究協力、思想史を中心とする日本の型の文化研究プロジェクトへの参加など多岐にわたった。いずれも努力を要する課題であったが、仕事は楽しんでやれた。そのうち自分が代表者である小

*1 私の最初の論文は1960年の教育心理学研究に出たが、それは卒業論文を基にしたものであった。当時の研究水準と学部生の産出した知見との距離も、当該の雑誌の採択可能性も、今日と比較すると大きな差がある：小嶋秀夫（1960）. 親子関係と幼児の社会化 教育心理学研究, 7, 200-209.

*2 たとえば次の2論文の中で、そのことに触れている：小嶋秀夫（印刷中）人間発達と発達研究が位置している情況 小嶋秀夫・速水敏彦・本城秀次（編著）人間発達と心理学（仮題）金子書房；Kojima, H. (1997). Problems of comparison: Methodology, the art of storytelling, and implicit models. In J. Tudge, M. Shanahan & J. Valsiner (Eds.), *Comparisons in human development: Understanding time and development* (pp. 318-333). New York : Cambridge University Press.

規模の実証研究では、自分も第一線に出て働いた。これは私が親しく接したアメリカの発達心理学者、ジェローム・ケイガンやマイクル・ルーウィスが大規模な研究を進行させるときのスタイルと同じで、私の性分の反映でもあった。

それ以前の私の探求、すなわち前半の20年のそれにおいては、研究の問いは次々と枝分かれしていったが、それぞれの枝道では直線的に答を詰めて行けるタイプのもが多かった。それは沢登りのようで、取り付いた沢を遮二無二進むか、それが出来ない場合には捲いてでも進むか、あるいは行く手が阻まれれば放棄するかという性質の探求が多かった。今から考えると、どうでもよい沢にこだわり過ぎたこともあった。

それに対して後半の20年間の探求は、私の頭の中の地図に空白地帯が多く、問題自体が直線的には詰めて行けない複雑な構造を呈していて一筋縄では行かないものばかりであった。課題解決に必要な手段の準備から始めなければならぬことも多かったが、探索活動自体は直線的な課題構造の場合よりもずっと楽しかった。しかし、不確定性に耐えながら問い自体を組み直して行く過程は、精神的努力を要した。ただし、心理学の領域での実証的研究に関しては、せっかく自分が中心となって構成した概念、提起したモデル、考案した方法などを活かした研究を息長く一貫して続けることをしなかった。実証研究のテーマをせいぜい2つ位までに絞って今まで持続したとすれば、現在の私とは相当に違った状態になっていたことであろう。しかし、それを経過した中間段階としての80年代の終わりには、私はまだ腰が屈んでいなかっただけでなく、五十路の坂の困難さを予期出来なかったので、ギヤーを切り替える準備態勢も整えていなかった。

そのせいもあるのだろう。1990年代の私は、歴史的・文化的視点から人間発達に関する思索をいくらか進めることはできたが、残念ながらこれというまとまった成果を産み出せなかった。

以上のような認識に立って、前半の20年を駆け足で回顧しようというのが、この小論の主目的である。それは今の時点で組み立てた物語りであって、過去の事実を正確に反映したものではない。逆に言うと、だからこそ、今組み立てて語ることに、独自の意味があるのだと思う。

それは、図1に示されているように、ある未来展望に立った現状把握を反映して構成され語られた過去である。ところが現在の私がつまみ未来像には、(2)の矢印が示すよう組み立てられた過去の記憶が投影されており、その振り返り(3)が現状把握に影響している。その視点からの回顧(1)は自分の現在と過去との内的な対話であり、それが

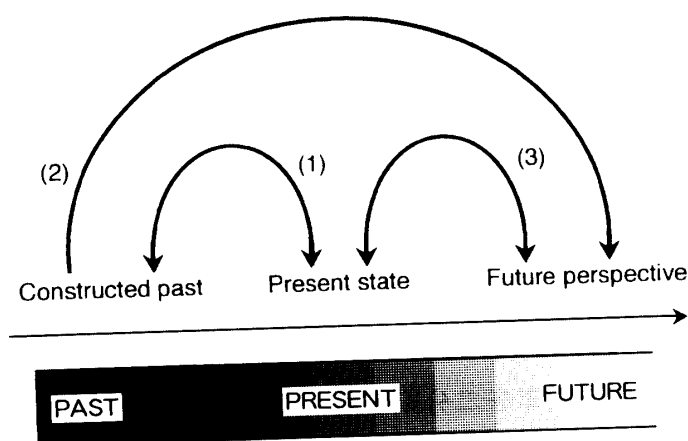


図1 歴史を語る際の3つの構成成分間の関係 (Kojima, B-73)*¹

個人的・主観的ヒストリー・テリングの主材料となる。私の話は「きょうの話」に重点を置くものであるから、それが客観的に証明できる事実と食い違っていたり、「昨日した話」とずれているかも知れない。それは史実を軽視するのではなく、今の私にとっての「本当の話」をしたいという構えに重点を置くことから来ているものだとご理解いただきたい。

2 歴史的な理解と物語

すぐに本題に入りたいところであるが、ここで私にとって無視できない怖い意見に出会うことになる。それは、「歴史は物語である」という主張に対する中世史研究者、保立(1998)による激しい反論*²である。「歴史学は物語である」と私が思っているわけではない。逆に、間もなく引用する保立の目指すような歴史研究が、人間発達に関心を持つ歴史の専門家によってなされ、その領域での歴史的変遷が明らかにされるならば、発達研究者にとってこれほどありがたいことはない賛同するものである。

しかし別の側面では、発達研究者が個体発達の過程をまとめて説明する過程にも、心理臨床家がケース・レポートをまとめる過程にも、何らかのモデルに基づいて組み立てられた個人の変化過程に関する一種の歴史的ストーリー・テリングの過程が含まれると考えざるを得ないとする私の見解と、一見ニアミスが起こっているのである。

ここで、保立(1998)の「はじめに」(pp.1-12)の一部を引用する。

*¹ 図表の出所は、研究業績一覧の分類と番号を示す。例えば、B-73はセクションBの73番の文献を表す。それらが最初に発表した年次、形式ではない場合がある。

*² 保立道久(1998). 物語の中世 神話・説話・民話の歴史学 東京大学出版会

「いうまでもないことながら、学問としての歴史学はけって過去に「物語」を求めようとはしない。歴史学という学問の役割は「史料」の解析を通じて、現在から見ればはるかなる過去、けれども、たしかに客観的なものとして存在していた過去の社会や文化の実態に迫っていくことにある。……「歴史は物語である」と主張する議論は、これまで何度も、あたかも物知らぬ愚者に対するお説教のように、歴史学界の外から投げかけられてきた。しかし歴史の研究者は、なかなかそういう議論にうなづくわけにはいかないのである。(中略)

歴史家の仕事の目的は、観念と意識の諸形態をその一部として包摂している社会と文化の客観的な実態を明らかにし、その全体から、客観世界を反映した歴史像・イメージを形成することにあるのであって、自身、物語を語ろうとするのはまったくの錯誤である。私たちの大望は、そのようなことにあるのではなく、むしろさらにそこから進んで客体的な歴史の運動、その構造や法則性を明らかにすることにこそある。そして、歴史家の世界の現実においては、そのような手間のかかる仕事に倦んだ時、安易な思い付きと物語を語ろうという落とし穴がまちうけているのである。」

「観念と意識の諸形態をその一部として包摂している社会と文化の客観的な実態を明らかにし、その全体から、客観世界を反映した歴史像・イメージを形成すること、……さらにそこから進んで客体的な歴史の運動、その構造や法則性を明らかにすること」と保立が述べた歴史研究の目標から研究上の問いが発展して、それがその世界で生きる人々との間でどのような相互作用を繰り広げたのかという方向に及ぶとすれば、歴史的・文化的情況の中で人間の生活と発達を考えようとする志向性をもつ発達研究者にとって、強力な味方が現れることになる。このような発達研究者は未だ少数派であり、しかもその内部でも多様性があるが、世界的に見ても無視できない地歩を確保しつつある。

しかし他方で、個人と相互作用しながら、なお個人を超えた外在的存在として機能する文化及びその変化過程の記述と、その中で生きる個人の変化過程とは、異なった水準の事象である。後者の記述に関しては、学問的研究者によるものでも、職業的実践家によるものでも、さらに発達とエイジングの過程を辿る本人や関係者による記述であっても、個々の事象をまとめた変化過程を組み立てて相手（その中には自分も含まれる）に伝達するためには、個人的にかつ文化的な意味づけのモデルとして物語の世界が関与せざるをえなくなると私は考えている。

歴史家として変化のプロセス・機構を理解してまとめ

て表現する作業の中にも、歴史家が抱く何らかのモデルが働いていることは否めないのではないか。そしてそのモデルは、全体の変化の筋書きを規定するストーリーの性質をいくらかでも帯びざるを得ないのではないか。発達研究の場合は、個体発達過程の歴史的・形成的理解法を強調する。発達研究者は、これまで提起された人間発達のモデルが、人間理解にプラスだけではなくどのようなマイナスの働きをしたかを吟味しつつ、なおモデルの中身が発達過程の全体像のまとめに与える影響を見失わないようにしようとする。その場合に、時間軸に沿って展開する多水準の複雑なシステムをとらえるための何らかのA・プリアリな枠組みとしてのモデルなしに、つまりbottom-upのempiricismだけでは、意味あるまとめの作業が成り立つとは思えないというのがわたしの見解である。

3 前半20年の歩みから

3.1. 初期のフィールドでの経験

私が教養部を終えて専門課程に進んでから始まったことの中で、今でも意味があると思うことの1つは、ある保育所をフィールドにして大学院を終えるまでの数年間、実に頻繁にそこに通ったことであった。結果的に、その子どもを対象にして卒業論文を書き修士研究までをしたので、多様なデータを取ったのは事実である。その中には、継時的に実施したソシオメトリック・テスト、組織的な行動観察、子どもや親についての評定、知能・パーソナリティ・子どもが親についてもつ認知像を初めとする何種類もの検査、子どもによる家族描画などが含まれていた。しかし、大部分の期間は私は「お兄ちゃん」と呼ばれる立場で遊びに行っていたのであって、子どもを自然に近い状態で観察したり、保母さんと子どもやその家族について話をしたりして過ごしたのであった。子どもが怪我をしたときに医院に連れていったり、学芸会のような行事があると率先して手伝った。また、研究の結果として浮かび上がってきた「社会的参加がうまくできないことが問題だ」と判断した子どもたちに対して、当時助手であった西岡忠義氏とアクション・リサーチ的に特別セッションのプログラムを作り、実際にやってみたこともあった。

そのようなフィールドで、個々の子どもの内面に関するデータと、日常場面で観察される子どもの姿を頭の中で関係づけながら、そして親の特徴も考えあわせて子どもを理解しようとしたことは、私にとって後々まで役に立つ意味ある経験となった。大学で学生・院生の名前を覚えるのが不得意な私であるが、もし40年以上も前に私が接した子どもたちが、そのときのままの姿でいま眼前

に現れたら、かなり多くの子どもの名前がいただけるだけでなく、その子どもの特徴も覚えているだろうと思えるほどである。

名古屋大学教育心理学教室の共同研究の成果をまとめた本^{*1}を、当時3年次の学生であった私は書店で目にして購入しており、それが卒業論文で親子関係のことをやってみたいと考えるのにつながったのだと思う。私が設定した基本テーマは、親子関係と社会化を通じた子どものパーソナリティ形成であった。その研究を進めるために、親子関係をどのようにしてとらえるかがまず大きな課題となった。

3. 2. 親子研究を把握する方法論の初期の構想

親子の社会的相互作用は、一方の行為が他方の行動系列に密接に結びつき、循環性をもつものである。そこでの相互作用 (social interaction) という現象を直接に問題にするのか、それとも関係性 (relationship) として現象をとらえようとするかという水準の違いを区別する必要があるが、いずれにしても親と子どもは相手に対する認知をもち、それに従って相手に対する態度・行動を方向づける。そのため、相互作用事態あるいは関係性を、親と子どもがどのようにとらえ意味づけるのか、そのとらえ方は相互にどのような関連をもっているのかを知ることが、研究上の重要な課題となると私は考えた。そして、この主観的な、しかし親と子どもにとって現実性をもつ関係を、より客観的に定位づけるために4つのステップからなる方法が必要だと考えた。

それに関して私が1963, 1965年の論文^{*2}で提起したことは、要約すると次のようなものであった。当時から私はマイクロな水準での社会的相互作用分析よりも、その積み重ねによって形成される関係の水準での事象の把握を重視していた。関係の性質によって、表面的には同じに見える相互作用過程も違った機能をもつ可能性もあると考えていた。以下で「関係」ということばが使われているのは、そのためである。

ステップ1： 親、子ども、そして第3の観察者が認知している現実水準（意見・態度水準及び投影水準と区別される）での親子関係を知る。観察者のデータは、研究上の問いが必要とする場合に用いる。

ステップ2： 上記の二者または三者がとらえている関

係の相互間の関連を調べる。とくに親と子どもの観点からとらえたものは主観的解釈あるいは意味づけの性質を強くもつが、親子相互の認知のそれぞれをいわば宙に浮かせたままで、すなわちその客観性を問わずに、認知したものについての報告を求め、それら相互間に有意で予測可能な関連があるかどうかを調べる作業である。

それをより広く、かつ客観性の高いコンテクスト（状況）の中に位置づけるとともに、親と子どもの内部での心理学的過程を問題にしようとするのがステップ3と4である。

ステップ3： 親子関係についての親と子どもがもつ意見・態度水準の反応（たとえば、「親は子どもに一貫した態度で接するべきである」というようなオピニオン）及び投影水準での反応（たとえば、親に対する子どもの隠された敵意、恐れや甘えなど）を調べる。また親と子どもの、対人行動・対人関係の認知にとくに関係するパーソナリティ要因を調べる。これらの結果をステップ1での現実水準での記述と関連づけて、それと結びついている内的要因を探る。

ステップ4： 視点を外に向けて、親と子どもを取り巻く家族・社会・文化などの要因を調べる。これは上記の3つのステップによりとらえられた関係の記述を、より広いコンテクストの中に位置づけ、より客観的な場所に繋留するためのものである。また他方で、親のパーソナリティ形成に影響を及ぼしてきた諸要因（生育史などの過去経験を含む）を把握して、ステップ1での親の認知とステップ3で調べた親の意見や親の願望を生み出した背景を探る。これらの作業によって、親子関係の把握は、一応の目的を達すると考えた。

この提案は、今考えると不十分な点があるが、逆に完全に無意味になったとも思わない。社会や文化の問題は、後半の20年で別の形で扱うようになったし、親となる過程に及ぼす過去経験の影響は、後に多くの研究者が関心をもつテーマとなり、私もその一部を扱っている。

しかし、1960年代前半の私が実際に手を着けていたのは、ステップ3までのデータであった。ステップ4は将来の課題ではあるが、自分は当面のところ扱わない積もりであった。そのうえ、文献のレビューを通じた自分なりの評価によって、ステップ3で得られる意見・態度水準のデータ（当時よく使われたPARIなど）の有用性への疑念と、投影水準の情報をもつ多義性の問題の処理の困難さのために、この2つの水準の情報までを統合して扱うことに早々に見限りをつけていた。その結果、その後の研究は、最初の2つのステップの問題に集中することになった。以下ではそこで扱ったいくつかの問題から、

*1 依田 新〔編〕(1958). 家族の心理 培風館

*2 小嶋秀夫 (1963). 親子関係の心理学的分析 京都大学教育学部紀要, 9, 125-144.; 小嶋秀夫 (1965). 親子関係把握の方法論 金沢大学教育学部紀要 (人文・社会科学編), 13, 165-178.

親子関係のとらえ方の概念化と方法論にかかわる3つの問題を選んでかんたんに触れる。そのような検討結果が、親子関係と子どもと親の発達に関する諸変数との関連の研究にどのような役割を果たすのかという論議には、この小論では立ち入らない。

3. 3. 親子関係の把握

1) 親子関係のとらえ方のカテゴリー

表1と図2は、前のセクション3. 2. で述べたステップ1に関するものであるが、私が研究の出発点でフルにもっていた枠組みではない。それは1978年の日本教育心理学会で「歴史と展望」のシンポジウムが企画され、私が親子関係・家族集団の研究をレビューした際に提起したものであり、再考や明確化を含んだものである。実は、その時期あたりから二者関係を越えた家族間の相互作用を扱おうとする研究が増え始めていたが、表1はそれまでの研究の大多数を反映した二者関係のモデルによるものである。

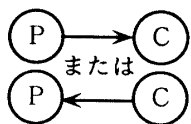


表の3つの段に並べた次元は、誰から誰に向けられる作用であるかを区別するためのものである。IとIIにIIIのカテゴリーを加えたのは、それまでの相互作用の歴史

を反映して形成されている両者間の「関係そのもの」を問題にすることの意義に私が改めて気づいたからである。その次元の各カテゴリーについて、3種のデータ源が区別してある。それは、親子関係についての情報の産出者が誰であるかの区別が、親子関係の記述と、親子関係の変数と他の変数との連関に関する研究知見の両方を評価する際にきわめて重要であるという考えによるものである。

表1の横には、一般的態度・行動(g)と特殊的行動(s)を両極として、程度が連続的に変わる次元が導入されている。それは図2に表されているように、生態学的状況の中で継時的に繰り広げられる親子関係事態全体の中から、どのようにしてデータが取り出されたかを明確にするためのものである。

たとえば、「あなたは父親にどれくらい受容されているか」(I g)を問われた子ども(データ源)は、状況と時間の両軸に関して何らかの形で情報を圧縮して一般化したり、頻度にかかわらず強く印象づけられた表象で代表させて反応するであろう。図2での「若干の状況の分化」とは、たとえば、「子どもが親に援助を求める依存状況」や「子どもが親からの自律を求める状況」のよう

表1 現実水準での親子関係のとらえ方を分類する二次元カテゴリー
矢印は態度・行動の方向を表す。Pは親、Cは子ども、Oは観察者を示し、各区画に代表的な例を示す。(小嶋, G-24)

人間関係のモデル	データ源	一般的態度・行動 g	特殊的行動 s
I 一方的作用 	P . C . O	I g ・ PのCに対する愛情の程度 . ・ CのPに対する支配性の程度	I s ・ PのCに対する指示・命令の頻度・強度 . ・ CのPに対する愛着行動の頻度・強度
II 相互作用 	P . C . O	II g ・ 代表値化されたP-C間の相互作用のパターン	II s ・ 課題解決場面におけるP-Cの相互作用過程 . ・ 自由遊び場面におけるP-Cの言語的相互作用過程
III 関係そのもの 	P . C . O	III g ・ P-C間の親密度 . ・ P-C間の勢力関係	III s ・ P-C間の支配性の階層的順序 . ・ P-C間の空間的距離 (スペーシング行動)

*1 下記の論文に、私がレビューでとった視点が記されている。小嶋秀夫 (1980). 親子関係・家族集団の研究を中心にして第20回日本教育心理学会総会「歴

史と展望」刊行委員会(編) 教育心理学シンポジウム (Pp. 195-214). 川島書店

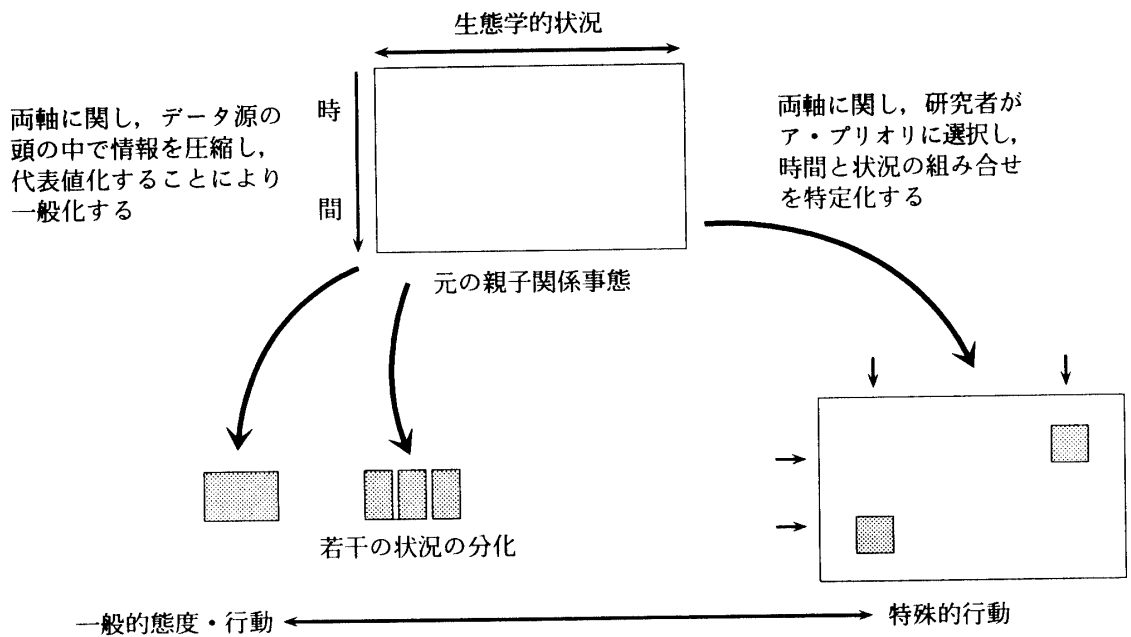


図2 親子関係に関する一般的態度・行動—特殊的行動の次元 (小嶋, G-24)

に、状況別にデータを得ようとする場合を示している。

また、実験的に設定された観察場面で子どもが母親に向ける愛着行動 (Is) に関心をもつ研究者は、まず状況と時間を特定化する。さらにチェックすべき子どもの行動カテゴリーや評定すべき子どもの特徴も予め決めておくことが多い。したがってデータ源 (大部分の場合は、訓練された観察者) は、評定に際して情報の統合をすることはあるにしても、データ産出過程の透明度は高い。

このような考えに基づいて、表1で示した親子関係のとらえ方のそれぞれを研究者が用いる根拠と研究の評価を私は行ったのであるが、ここではその内容にまで立ち入れない。

2) 親による記述と子どもによる記述の対応関係

セクション3.2. で述べたステップ2の課題は少なくないが、中心的な問題1つに絞って述べる。それは、子どもに対する親の態度・行動に関する親と子どもの認知の対応性の問題である。実際的には、認知そのものを取り出せないで親と子どもによる記述の対応性を調べることになる。親と子どもの認知のずれの問題は、とくにわが国の研究者が関心をもったテーマであった。しかし、そこでは親と子ども間の認知構造やものの受け取り方・考え方の違いを反映した「記述の次元の食い違い」と、少なくともある次元に関して類似した記述の枠組みをもつ親と子どもとの間に見られる「記述のずれ」とが明確に区別されていなかった。この問題は、最終的には個々の親子の対に関して調べるべき事柄であるが、その前に集団水準での検討が必要だと私は考えた。

子どもに対して親が取る行動に関して、親と子どもが

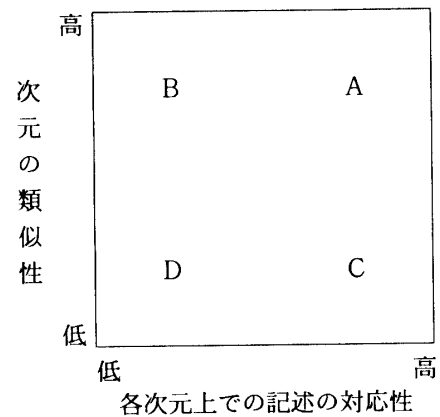


図3 2群の記述者による記述の対応関係 (小嶋, E-10)

もつと考えられる認知構造は、ともに多次元からなるであろう。実際的には、子どもに対する親の行動についての報告を親と子どもの両方から得た集団データを分析して、両者が使う記述の枠組みを構成する複数の次元を見出し、次に親と子どもの次元間の連関のパターンを調べることから始めるしかない。図3は、この問題を扱うために私が1968年に提起した図式であり、表2と表3はそのときに例示したデータである*1。

図3に関しては、結果がA, B, C, Dとなったときの親子関係に対する心理学的意味についてその論文で論じているが、ここではその内容に立ち入らない。私のこの図式は、後に発達の縦断研究の枠組みでバルテスたち

*1 小嶋秀夫 (1968). 親の態度・行動の心理学的測定 社会教育研究 (金沢大学), 9, 157-170.

が提案した図 (Figure 2)*¹ に酷似している (A, B, C, D に対応して a, b, c, d のケースを論じている)。図 3 の縦の次元に対応するのが、彼らの因子パターンの不変動・変動で、横の次元に対応するのは彼らでは因子得点の安定・不安定となっている。次に示す表 2 と 3 から、私も因子パターンの類似性の程度と因子得点の相関を当てていたのは明らかである。もっとも彼らのもとの考えは、1967年にネッセルロードがパーソナリティ理論の枠組みで発表していた。因子分析モデルと同じ頃に、全く別の適用領域で考えていたものがいたことになる。

表 2 は、子どもに対する父親の行動を調べるインヴェントリーを使い中学生とその父親に報告を求め、その項目水準での反応を親子別の対応した 18 の尺度得点 (図 4 の変数に当たる) に合成し、幾ステップかの因子分析の過程を経た最終結果の例示である。表 2 から、集団水準では、父子ともインヴェントリーに対する反応は、類似した 3 次元の因子にまとめられるといえる。そして、表 3 の結果と組み合わせると、父子の対応した因子に関しては、図 3 の A-B 間の A 寄りに位置づけられる。

表 2 子どもに対する父親の行動に関する中学生男児の報告とその父親の報告の各 3 因子の類似性
表中の数値は coefficient of congruence (小嶋, E-10)

		父 親		
		I	II	III
男	I	.981	.081	.222
	II	.292	.979	-.043
児	III	-.095	-.028	.954

表 3 子どもに対する父親の行動に関する両者の報告の個人別因子得点の相関 (小嶋, E-10)

		父 親		
		I [.944]	II [.930]	III [.891]
男	I [.954]	.366 (.386)	-.161 (-.141)	.012 (.013)
	II [.948]	.005 (.005)	.341 (.363)	.041 (.045)
児	III [.855]	-.201 (-.224)	-.088 (-.099)	.309 (.354)

太字は有意な相関を示す

[] 内の数字は、各因子得点の信頼性係数
() 内の数字は、稀薄化の修正をした相関係数

一方、対応しない因子に関しては、父親の I と子どもの III の場合を除いて、すべて図 3 の D の近辺に位置づけられる。ただし、どのあたりに位置づけるかという目盛りはない大ざっぱな話である。表 3 の相関係数の低さは、副次的な要因がいくつも関与していることを示唆しているが、それらが何であって、どのような作用をしているかについては推測の域を出ない。

子どもに対する親の行動を記述した項目に反応することを求める段階で、すでに図 2 で示したようにデータ源の頭の中で何らかの圧縮あるいは代表値化がなされているのは事実である。それに加えて、表 2 や表 3 に至るまでには、もとのデータに何重もの合成、平均化、情報の圧縮の過程が加えられている。とくに表 2 に至るまでは、親子の組から得たデータであるという利点を全く活かしていない。親子別々に見出した因子の類似性係数が高いからといって、類似した因子だといいた切れない面がある。そもそも、それがいくらかでも現実の親の行動を反映しているのかさえ確かでない。表 3 の結果は、いくらか安心させるものであるが、この場合の 3 因子構造が適切かについては確信がもてない。

3) 砂上の楼閣か

前のセクションでの例示を図 4 を使って説明する。子どもに対する父親の行動 (表 1 での 1 方向的作用) に関して、子どもが報告した結果を m 個の尺度得点 (変数) にまとめて表にしたのが、左端の上半分のデータ行列である。同じことについて父親から得たデータ行列が下半分である。子どものデータ行列から相互相関行列 R_{11} をもとに因子分析・回転して 3 つの因子を見出した。同じことを父親のデータの相互相関行列 R_{22} についても行ってやはり 3 因子を見出した。それらは表 2 に示したように、相互によく似ていた。しかし、それは前のセクションで扱った問い、すなわち、親による記述と子どもによる記述の対応関係については何の答も出していない。一般人がもつ暗黙の対人行動理論の因子や、言語刺激に対する反応を求めたのであるから言語的意味の因子が出てきて、その次元の構造が中学生と親とで似ていただけだということもありえる。それでは、いわば砂上の楼閣に過ぎない。

今回の例のように、親子の組からデータを得ているのだから、図 4 の 2 つのデータ行列を横につないで $m + m'$ 個の変数の相互相関行列 R の因子分析をすればよいと考えることもできる。それにより、図 4 の右上のよう

*¹ Baltes, P. B., & Nesselroad, J. R. (1973). The developmental analysis of individual differences on multiple measures. In J. R. Nesselroad & H.

W. Reese (Eds.), *Life-span developmental psychology: Methodological issue* (pp. 219-251). New York: Academic Press.

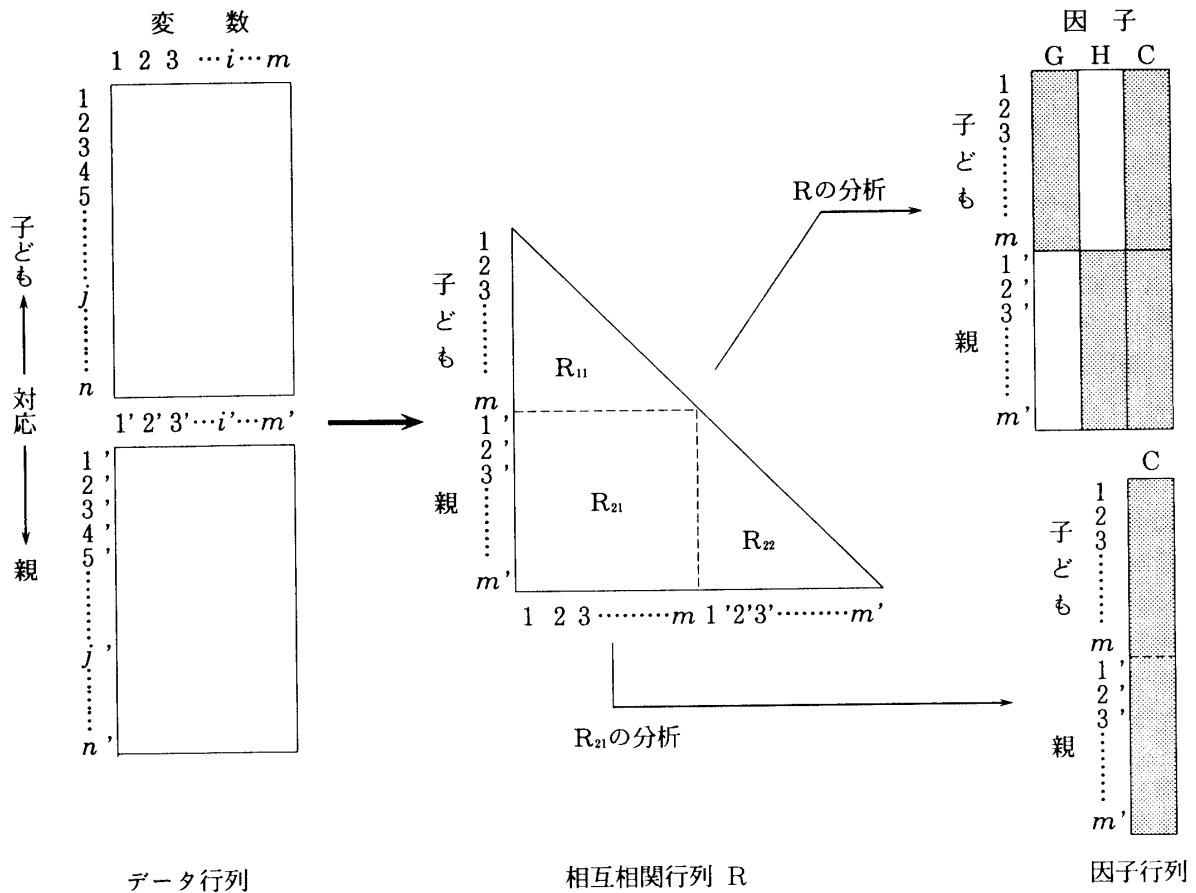


図4 対応した親子の群の対称的変数群の因子分析の2つの方法 (小嶋, E-10)

な因子行列が得られるかも知れない。ハーフ・トーンの部分は意味ある因子パターンを、白の部分は0に近いパターンを示している。Gは子ども特有の、Hは親特有の、そしてCは親子に共通する因子パターンである。ところが、実際にそのような分析をして因子回転をした結果はGとHばかりしか生み出さないのが普通である。そのいちばん大きな理由は、Campbell & Fiskeのいう「方法」の要因^{*1}であると私は考えた。子どもと親という報告者の違いは、大きな「方法」の要因である。それを初めとしていくつかの変動因が関与して、親と子どもの因子を分離させるように働く。つまり、測定の対象としている概念以外のものが絡んでしまう。

図4にはR₂₁という非対称の相互相関行列が含まれている。その分析方法があるのではないかと考え、大学院生時代に周囲の因子分析に詳しい人に相談したが、そのような方法はないといわれた。自分で因子分析モデルを

考案する数学的基礎がなかった私は、そうなのかと思っていったんは諦めた。しかし何年か後に、京都で短い時間タクシーの中でCronbachと話す機会があり、組になった親の認知と子どもの認知の対応関係の構造を問題にしたいのだといった。それは彼をあるパーティー会場に案内するために迎えに行ったときのことで、最後にエレベーターを降りる段階で、Tuckerのバッテリー間因子分析の方法^{*2}が利用できるのではないかと彼がいった。

後で教えてもらった論文に従って、早速に自分で分析プログラムを金沢大学のNEAC 2230で作成した。それは2進化10進法によるマシンでNARCという独特のコンパイラ言語が使えたが、ユーザが使えるコア・メモリーは確か2,000語でそこにプログラムもデータも収容しなければならない。それに10,000語ほどのドラム・メモリーの一部が使用可能だったように思う。この2230で学位論文(66年春に提出)の中心部分の計算をただけでなく、その後も暫くそれで仕事をしたことを、今の若い人々は

^{*1} Campbell, D. T., & Fiske, D. W. (1959). Convergent and discriminant validation by the multitrait-multimethod matrix. *Psychological Bulletin*, 59, 81-105.

^{*2} Tucker, L. R. (1958). An inter-battery method of factor analysis. *Psychometrika*, 23, 111-136.

理解できるだろうか。そして計算結果が出た頃に東京からCronbachが金沢に来て、私の分析結果と一緒に検討してくれた。

図4の右下に示されている子どもと親に共通する3因子の構造が、基本的に R_{11} と R_{22} から見出した子どもと親のバッテリー内因子のそれと類似したものであることがわかったとき、自分が砂上の楼閣の構造に振り回されていたのではないと安心した。

ただし、さらに洗練された手法である3相因子分析には手が出せなかった。独力でそれを進めて行くよりも、親子関係と子ども側の諸変数の関連を探る仕事の方が大切であると思ったのが主な理由である。ところが、子ども側の諸変数にしても、その概念化や測定にいろいろ問題があることが分かり、その問題の解決に取り組むことになる。その1つの例をかたんに次のセクションで述べる。

3. 4. 認知スタイル研究から

Witkinが長年かけて構築していった場依存性—場独立性 (field-dependence vs. field-independence) の概念を含む心理的分化の理論は、発達心理学から考えても興味あるものであった。もともと成人を対象として出発したその研究を、彼も後に8歳位まで対象年齢を下げた研究していた。

他の研究者はさらに低年齢の子どもを対象にした検査を開発して使用していた。しかし、それらのいくつかを検討した私は、Witkinの概念を適切に測定する手続きになっているかを疑問に思った。そこで、まず幼児用の埋没図形検査 (EFT: Embedded-figures test) を開発することにした。幾段階かの改訂を経て、最終的に5歳前からの日本の子どもにおいて、Witkinたちが8歳児以降で測っているものと本質的に同じ概念を測定できると考えてよい検査 (PEFT) が出来上がった。図5はその項目の1つを示している。私の工夫の中心は、見慣れた対象の中に隠された図形ではなく、幾何学的図形の中に埋め込まれた単純な幾何学的図形という原型に戻ったこと、単純図形の記憶という要因の関与を除去したこと、課題が要求していることを理解させるためにいくつかの練習問題を加えたこと、それに単純図形に馴染ますためとそれをなぞる時間を測るために、後のテスト項目に出てくる単純図形をなぞる課題を最初に導入したことである。

ところが、棒—枠組検査 (FRT: Rod-and-frame test) は一筋縄では行かなかった。過去にやや安易に作成し使用されたポータブル式のRFTではなく、Witkinと同様の暗室式のRFTに戻したが、サイズは子どもに

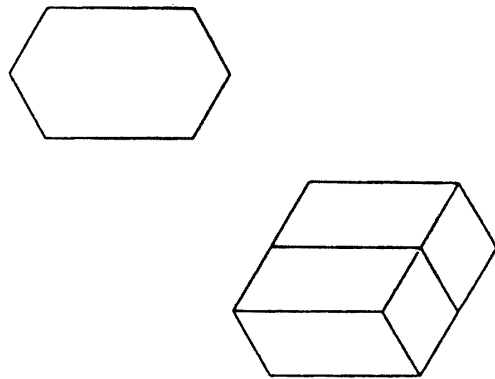


図5 4～7歳児用の埋没図形検査PEFT (小嶋, 1976) の項目例 (小嶋, A-15)

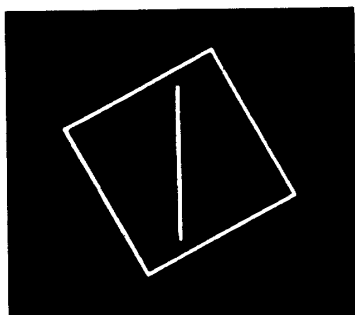
合わせて縮小した。移動可能な暗室、その中で使用する刺激提示・記録読み取り装置と子ども用の椅子など、装置面で新機軸を打ち出したが、いちばん注意したのは、その課題が子どもにとって意味のあるものにする検査事態をつくることであった。

そのような工夫にもかかわらず、得られたデータを集団だけでなく個人別に、条件ごとの反応パターンに戻って詳細に分析すると、まだ問題点があることが分かった。定められた方法で単純に個人毎の得点を出すだけでは済まされない。その問題をかたんにいうと、まず、棒だけを提示した条件では子どもの中で確立していた「縦に真っ直ぐ」という垂直の基準が、枠組みを導入 (図6) したとたんに、それとは別の基準 (それも2種類ある) が発生するらしいことである。さらに1人の子どもの中に複数の基準が生じる可能性すらうかがわれた¹⁾。そのようなデータ自体は面白いものであったが、かたんにとはとても解決できそうにない行き詰まりに直面した。

自分が心がけてきたのは、特定の理論のもとでの概念化と測定、測定事態で起こる心理学的過程の重視、子どもにとって意味のある課題事態の工夫であったが、急に幼児まで下ったのは早計であった。確実に測れる段階の児童で確認してから、徐々に年齢を下げて行くべきであった。

認知的熟慮性—衝動性に関しては、それを測るKaganの児童用MFF検査を使用した。ところが、1つの測度である初発反応時間の信頼性は高いのに対して、もう1つの測度である誤数の信頼性がかなり低いことが自分のデータでもすぐ分かったし、他の研究者も指摘し

¹⁾ Kojima, H. (1978). Assessment of field dependence in young children. *Perceptual and Motor Skills*, 46, 479-492. 「真の垂直」の他に、「枠の辺」や「枠の角」が生じるケースがある。



(棒を回転させて垂直に位置づけると、どれだけ枠に影響されるか?)

図6 暗室式RFT (棒-枠組み検査) での提示刺激 (小嶋, A-15)
傾けた枠組みの中で、棒を垂直(「縦に真っ直ぐ」)に位置づけさせる課題(手続き及び結果: Kojima, E-25)

ていた。ところがその原因がかなり長い間私には解明できなかった。しかし子どもをタイプ分けして細かい分析を繰り返した結果、漸く正反応の位置という主要な原因が分かった^{*1}。それはささやかな発見の喜びではあったが、些細なことにこだわり過ぎたともいえる。

認知的熟慮性-衝動性の次元に関して、日本の子どもが熟慮性の側に傾きやすいことは、すでに波多野誼余夫

が1974年に指摘していた。それが本当であることは、Salkind, Kojima & Zelniker^{*2}で示した。図7に示したような文化差を見出すのはかんたんだが、一貫性のある説得的説明法はなかなか考え出せない。私はこの種の課題における子どもの課題解決の構え、さらにテストの期待・教示・反応、周囲のモデルなどの対人相互作用も絡み得ることに注目して、たんなる文化比較ではなく、文化の要因を包含した心理学的過程に関心を向けていった。

それは文化がもつ児童発達観の問題につながり、図8に示すような図式を1980年代の初めに提起することにつながった。それは(1)の要因を(2)を介して(3)と(4)の要因に結びつけるモデルである。それはすでに後半の20年に入った時期であった。

4 大きな情況の流れの中での偶発的出来事と人との出会い

私のその後の歩みへと展開して行く契機となったのは、1976年から始めた日本の近世以来の子育ての考えと実際に関するアマチュア歴史研究の経験である。自分の探求活動を通して、日本の家族生活とそこでの人間発達における文化の働きに気づき、文化の歴史性を認識した。そ

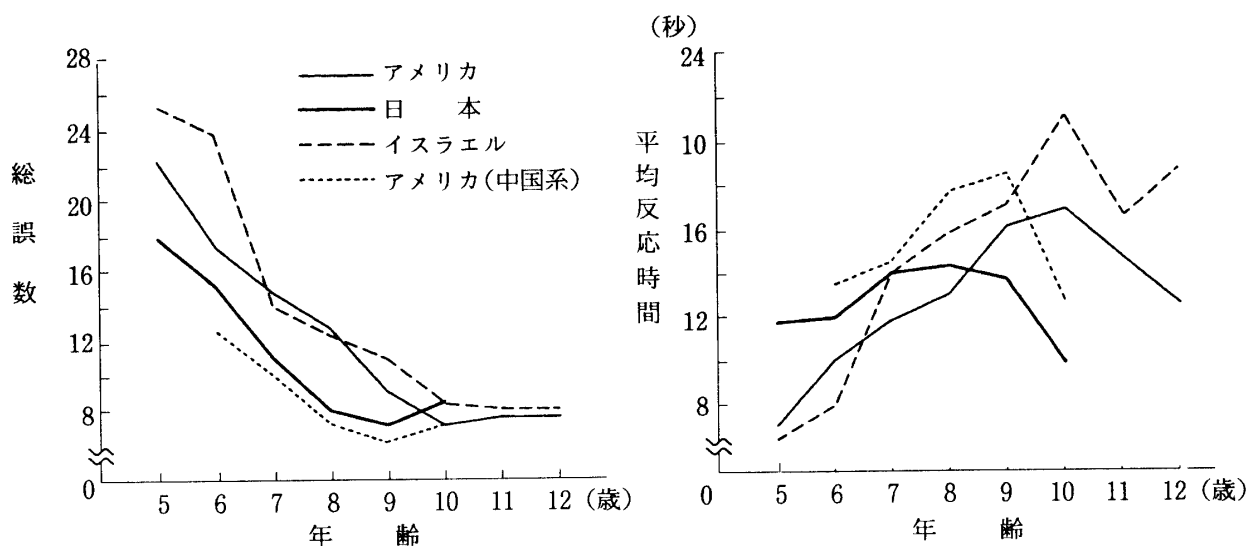


図7 4群の子どものMFF (図形マッチング) 検査の平均得点の比較 (小嶋, A-15)
Salkind, Kojima, & Zelniker (1978)と、労働者階層の中国系アメリカ人の小サンプルの子どもの結果 (Smith & Caplan, 1988) を合成。

*1 Kojima, H. (1976). Some psychometric problems of the Matching Familiar Figures Test. *Perceptual and Motor Skills*, 43, 731-742.
誤数の多い子どもは特定の位置の選択肢を選びやすく、それが正答である項目が信頼性を低める。

*2 Salkind, N. J., Kojima, H., & Zelniker, T. (1978). Cognitive tempo in American, Japanese, and Israeli children. *Child Development*, 49, 1024-1027.

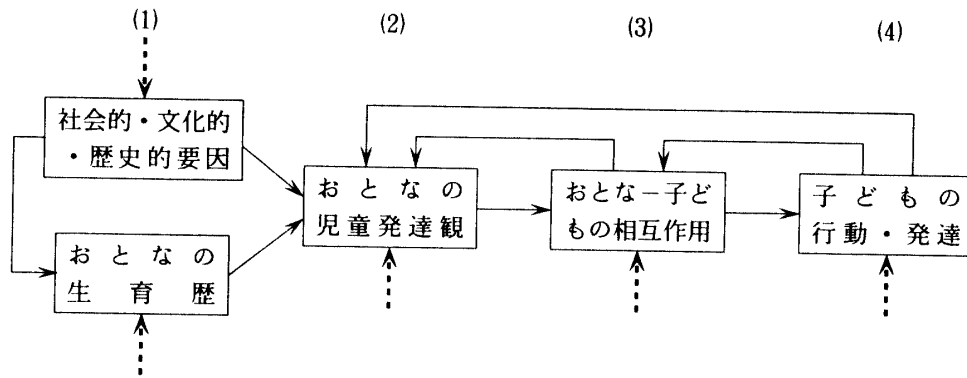


図8 児童発達観に関する諸要因の相互規定的関係の図式 (小嶋, B-24に基づく)
 実線の矢印は影響の方向性を示し、点線の矢印は他の要因の存在を示す。

の経験は、発達心理学の問い直しにもつながった。近く現れる本の第1部で、私は次のように書いている。「そのような個人の歩みが真空の中で起こったのではないのは当然である。それは、時代の学問状況の中で、ある程度の、いや文化人類学などに関してはかなりの程度の時間的遅れを伴って辿ってきた個人的歩みであった。主観的には自分の経験と思索を通して見えたのだと思っている道も、時代の学問的潮流に導かれたものであった。私個人に帰せられるのは、自分の研究課題の解決にあたって、複数の潮流が提供するアイディア群から自分の枠組みに適合するものを選択的に取り入れて組み合わせたやり方である。」

それだけでなく、1976年終わり頃から私が着手した仕事も、偶発的とも思えるいくつかの条件の重なりがなければ始めなかったかも知れないし、たとえ始めても不徹底のまま終わっていたであろう。そのことに関しては、すでに回顧している^{*)}ので、ここでは立ち入らない。

その代わりに、この40年全体を通して、学問に対する姿勢・取り組み方に関して、私に強い影響を及ぼした人との出会いについて述べる。それは、もともとわれわれの同僚の岡田さんが授業の一環として設定した学部生によるインターネット上の発信の試みで、その中に教官とのインタビューの結果が含まれていた。私に関するいくつかの質問の最後に、人生に大きな影響を与えた人について問われたとき、次のようなことばで答えたのであ

る(『』で括られたこの部分の文体は元のままとし、内容に少しだけ変更を加えた)。

『よくね、「人生の師」とか「学問の師」とかいうでしょ。あるいは「この1冊の本」とかね。私にはそう特定できるものがないんです。しかし私に大きい影響を与えた人は何人かいて、名前をあげると、まずリー・J・クローンバックとジェローム・ケイガンという心理学者です。この2人は学問に対する姿勢・取り組み方に関して、私に非常に強い影響を及ぼしています。モデルですが、業績の中身よりは姿勢です。

私はもともとは失敗を避けようとするかなり熟慮的な人間でした。ところがハーヴァードのケイガンのところへ行って1年間ワイワイやってるうちに、かれのもつ知的な衝動性のプラス面をいちばん学び取った。自分の潜在的軽はずみ加減が解き放たれたのです。「お前の中身よりも態度を学んだ」というとジェリーは気を悪くするかも知れないけれども、まあ分かってくれるでしょう。

クローンバックの方は徹底的にデータを読み、書いたものも何重にも何重にもチェックしていました。彼が新しい本を出版してしばらくしてスタンフォードに訪ねていくと、新刊の本にすでにいっぱい書き込みがしてある。次の改訂に向けて改善しているのです。リーにはそれより前に金沢に来てもらったのだけれど、私の分析データを四方八方から見て考えるんです。その姿勢を私は学び取った。かれらと師弟関係にある人にとっては、クローンバック先生・ケイガン先生でしょうが、私にとっては身近なりーでありジェリーなのです。相手が私に意図的に教えたのではなく、私が特定の側面を学び取ったのです。

それからもう一つ相互作用の影響がある。ユーリ・ブロンフェン布伦ナー、アラン・フォーゲル、ヤーン・

*1 小嶋秀夫 (1983), 歴史的にみた我が国の児童発達観 永野重史ほか(編) 発達心理学への招待1 新曜社; 小嶋秀夫 (1988). 家族関係と人間発達の領域の中で (pp. 113-126). 村上英治(編) 教育心理学への歩み 川島書店; 小嶋秀夫 (1989). 子育ての伝統を訪ねて 新曜社

ヴァルシナー、ヴィレム・コブスのような人は、ヒデオがどういう特徴を持っている人間で、今何に関心をもってどうしているのか・どう感じているのかを分かってくれていて、私も向こうがそれなりにわかっている積もりです。そういう人との相互作用は私に非常に大きい影響を及ぼしたのです。親友です。

その前に高瀬常男という先生がおられて、ものを問う基本姿勢と発想が私に影響を及ぼしてますね。時間の順序でいうと、高瀬・クローンバック・ケイガン・ブロンフェンブレンナー・フォーゲル・ヴァルシナーに代表される人々が、それぞれ違った形で私に影響を及ぼしている。私はよく自分の内部で問答をしてるんです。「私がこういうと、彼ならこういうだろうな」、「私がこうすればかれはこう批評するだろうな」と思うのです。それから相手が書いた論文を私が読むとき、私にはその人の風貌が浮かび、声がありありと聞こえてくるのです。』

なお、以前は小嶋独自のものだと思っ止めていた私の発想法に京都の影響が深くあると感じたといったのは、京都大学に赴任した山田洋子さんだった。形成期にあった私は確かにそこから何かを得たのだろう。

同じように、私が名古屋大学から得たものはきっと多いはずで、これからもそれをじわじわと自覚し、感謝の念が湧き起こってくるものと思う。私が見つけたことや問題にしたことに対して、「そんなこと、どうでもいいじゃないか」という声もあるかも知れない。誤解を避けるために急いでいうと、私自身も今はそう思うところがある。それに、そのような声がここであるとしても、それは冷やかしではなくて、「何を探求するのか」という私の生き方と研究に対する本質的な問いだと私は受け止める。

5 終わりに

私がやり残したことは少なくない。すでに述べたように、行き詰まりもあったし、戦線縮小のために諦めたこ

と、世界の進展に若干出遅れて諦めたことも少なからずあった。私に実質的な仕事ができる時間はあまり残されていないかも知れない。諦めることとこれからもしたいことの振り分けが課題となる。事情が許せば、これまで提起してきたモデル、アイデアの展開と、長らく放ってきた実証的研究が出来たらと思う。とりわけ自分の立てた研究課題につながる質的データの収集・解析をしたい。そのために、簡単ではないが柔軟な方法を発想・考案し、説得力のあるデータを確保できるように若い人々からも学びたい。「人間関係 (relationships) を通して展開する文化 (culture) と人間の心理的生活や発達 (mind) の相互関係を、歴史的・形成的視点から問う」という基本課題に、少しでもつながる仕事になればと思う。

最後にこれからを目指す若手のひとに何か1ついうとすれば、次のようになる。

自分の研究領域の今日的コンテクストを見失わずに、深い掘り下げを重ねて自分で見つけて考えたことを、とにかく口頭発表でもポスターでもいいから外国で発表する。それが面白いものならたいていアプローチしてくる人が出てくる。実はそれからの展開と相互作用の維持が大切なのである。

そのためには研究の内容面だけでなく、人間的興味・関心のつながりも無視できない。アメリカ人の中には、相手に人間として興味をもつと、そのことを表明して関係を強めようとする人がいる。ヨーロッパ人については私は詳しくいえないが、関係の深い特定の相手が、どのようなよい特徴（例えば、考えの深さや関心の広さ）をもっている人間であるかを周囲の人々に繰り返し話す人もいる。これが私の経験からいえることである。そのようなつながりを通して、研究者仲間の対人的ネットワークに自分もつないでもらうけれども、こちらも相手をつないで行くことが肝心で、私もその恩恵に浴してきた。そのような一歩を若い人々が踏み出すのを期待している。